



【「A がつくったクラゲやねん！」～『やってみたい!』が学びの芽～】



5月29日(木)、4歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。保育室では、段ボール箱をかぶった宇宙人がエレベーターに見立てたロッカーから出てきたり、マットを立てて隠れ家がある豪華客船の中でシマウマに乗っていたり、子どもたちが思い思いにしたい遊びを楽しんでいました。しかし、なんで宇宙人が段ボールかぶってるんやろ?豪華客船にシマウマおる?など不思議がいっぱいでしたが、子どもの発想ややりたいことがそのまま活かされていて、本気で遊び、楽しんでいる姿に思わず「かわいすぎる!」と声が出てしまいました。

学年が上がり、新しい生活や環境に不安をもっている子どもが多い中、『やりたい遊びを見つけてほしい』という保育者の願いがあり、危険がない限り、やりたいことを実現させてあげたいという保育者の愛を感じました。

一見、雑多に見える遊び環境でしたが、子どもたちの遊び方や発している言葉を聞いていると、遊びに必要な環境であり、意味のあるものばかりだということもわかりました。また、遊びの中で、困っている子どもがいると「会議するよ」と思いを伝え合う時間をつくったり、まだ遊びたい気持ちに寄り沿い「サーブタイムあり」と言って遊び時間を延長したり、「伝えなきゃタイム」として言いたいことを言いやすいようにしたりするなど、子どもの心をくすぐるワードをチョイスすることで不安が軽減し、居心地のよさにつながっていると感じました。



すると、A ちゃんが近づいてきて、「これは釣りやねん」「この棒で釣るねん」「使っていいよ」と教えてくれました。なかなか釣れない私を見て、さらに「これは磁石になってるねん」「段ボールでつくった魚は難しいねん」「こっちのクラゲは紙でつくってるから釣れるで」「これはA がつくったクラゲやねん!」と自信满满で伝えてくれました。A ちゃんが嬉しそうに自分がつくった遊びを人に伝えたくなくなった要因は何だったのでしょうか?



釣り場には、いろいろな素材の魚や生き物らしきものが入っていました。お世辞でも『上手』な仕上がりではありませんでした。おそらく保育者は、「これで作る?」「こうじゃあ!」と決まった素材や道具を提供するのではなく、選べる素材や試すことができる道具を準備されたのではないのでしょうか。また、見栄えを重要視することなく、A ちゃんが「クラゲ」と思い、つくった「クラゲ」は、どこから見ても「クラゲ」だねと共感する保育者の温かく寄り添う姿があったと思いました。保育者のかかわりで A ちゃんのやりたい気持ちが盛り上がり、自分の遊びに自信をもてたことが、『人に伝えたい』につながったと思いました。

そして、A ちゃんの発言からもわかるように、遊びながら素材の種類や違いを知っていることがわかりました。しかし、紙よりも段ボールは重たいとか、金属は磁石にひっつくとかを学ばせようとしたわけではありません。「あれ?」「なんでだろうか?」という疑問や発見の気持ちが芽生えた瞬間を見逃さずに、「こっちならどうやろ?」「もう一回やろ!」など試したり繰り返したりできる環境を整えることで、遊びからA ちゃんがいろいろなことに気づききっかけにつな

がったのではないのでしょうか。子どもが遊びを楽しむ中で、さらなる発見や新しいこと・ものと出会い、『やってみたい気持ち』が芽生えたときが、学びのスタートだと思っています。

乳幼児期で芽生えた『やってみたい気持ち』を受け入れてもらい、『やりたい遊び』を繰り返し積み重ねる中で、たくさんの学びの芽となり、小学校以降での学ぶ意欲の土台につながると願っています。

降の認知能力にもつながっていく部分だと感じました。